

全国食肉衛生検査所協議会病理部会研修会（第54回） における事例報告（Ⅰ）

信 澤 敏 夫 渡 昭 博[†]

全国食肉衛生検査所協議会病理部会事務局群馬県食肉衛生検査所
(〒370-1103 佐波郡玉村町大字樋越305-7)

Proceedings of the Slide-Seminar held by the National Meat Inspection Office
Conference Study Group (54th) Part I

Toshio NOBUSAWA and Akihiro WATARI[†]

Meat Inspection Office of Gunma Prefecture, 305-7 Higoshi, Tamamuramachi, Sawagun, 370-1103, Japan

(2007年7月6日受付・2009年4月27日受理)

全国食肉衛生検査所協議会病理部会が主催する第54回病理研修会が、2006年11月16、17日に麻布大学で開催された。今回は25機関から26題の事例が提出された。No. 1964～1986の23題と再提出演題のNo. 1916, No. 1940およびNo. 1945の3題、計26題について討議されたが、No. 1964は再検討となり結論が持ち越された。以下に、今回の25事例の概要を述べる。また、必要に応じて、診断名の項に疾病診断名を併記した。

事 例 報 告

1 牛の頸部の腫瘤

〔難波泰治（岡山県）〕

症例：牛（ホルスタイン種）、雌、39カ月齢。

臨床的事項：搬入時体温40.2℃。頸部左側に小児頭大の腫瘤を認めた。左後肢大腿部に褥創があった。

肉眼所見：左頸部の喉頭軟骨から尾側に、気管を取り巻くように40×20×15cmの灰黄色、充実性、やや強固な腫瘤が形成されていた。腫瘤断面には、黄色を呈する高度の壊死がみられた。気管気管支リンパ節は鶏卵大、肝リンパ節はウズラ卵大、内側腸骨リンパ節は手拳大に腫脹していた。他臓器の所見として、肺気腫ならびに心冠部、胃腸周囲および腎周囲結合組織の水腫が認められた。

組織所見：頸部腫瘤では、繊細な結合組織により、不

完全に区分された胞巣状構造がみられ、小円形細胞が充実性に増殖していた。これらは筋肉組織内に高度に浸潤し、部分的に筋組織を置換している部位もあった。小円形細胞は、赤血球の2倍程度の大きさの円形から多角形を呈し、核はクロマチンに富み、核小体は不明瞭で、細胞質に乏しい細胞であった。核分裂像はほとんど確認されなかった。気管気管支、肝および内側腸骨リンパ節も同様の所見であった。甲状腺は正常な組織像を保っていた。免疫組織化学的染色を実施したがすべて判定不能だった。抗ブタVimentin抗体でもまったく反応がなかったため、組織内の抗原性の消失がおきているものと考えられた。

診断名：小円形細胞肉腫（形態学的診断）

討議：リンパ系、神経系の腫瘍を疑ったが、免疫組織化学的に証明できなかったために形態学的診断となった。抗原性の消失が起きた原因としては、長期間のホルマリン固定等が考えられた。

2 豚の胸腔内腫瘤

〔木村政明（青森県）〕

症例：豚（雑種）、雌、年齢不明。

臨床的事項：病歴不明。健康畜として搬入され、生体検査時に著変を認めなかった。

[†] 連絡責任者：渡 昭博（群馬県食肉衛生検査所）

〒370-1103 佐波郡玉村町大字樋越305-7

☎0270-65-2135 FAX 0270-65-2869

E-mail : watari-a@pref.gunma.jp

[†] Correspondence to : Akihiro WATARI (Meat Inspection Office of Gunma Prefecture)

305-7 Higoshi, Tamamuramachi, Sawagun, 370-1103, Japan

TEL 0270-65-2135 FAX 0270-65-2869 E-mail : watari-a@pref.gunma.jp

肉眼所見：心膜腔に充満した灰白色腫瘍を認め、また肺胸膜および壁側胸膜に小豆大～ピンポン玉大、一部鶏卵大の灰白色結節が広範囲に多発していた。豚流行性肺炎の他、他の臓器には著変を認めなかった。

組織所見：心膜腔の腫瘍、肺胸膜の結節には、大型で明瞭な複数の核小体を有する大型、胞状核を持つ大型細胞と、クロマチン凝集性の小型核を有する小型細胞が混在し、それらが高度に浸潤、増殖して腫瘍組織を形成していた。心膜腔内では、小型細胞の増殖が顕著であったが、漿膜性心膜壁側板および臓側板（心外膜）部では、大型異型細胞の高度の浸潤、増殖が優位であった。心臓の一部のリンパ管内にも大型細胞が観察された。心臓および肺胸膜の腫瘍組織内に好酸球および好中球が浸潤し、また、マクロファージの出現も顕著で、多くの部位に starry sky 像が観察された。免疫染色で小型細胞はビメンチン、CD3、S-100 蛋白に陽性、大型細胞は CD79 α に陽性を示した。小型細胞および大型細胞はともにサイトケラチン、デスミン、 α -SMA、Factor VIII、LCA に陰性であった。

診断名：T-cell-rich B-cell lymphoma

討議：この診断名は、T-cell の高度な浸潤がみられ、かつ腫瘍構成成分中に腫瘍化した大型異型 B-cell が 5～10% の割合で混在することに由来する。本例の場合、特に心膜においては、それよりも B-cell の割合が高かったが、比率の差こそあれ何処の部位を観察してもこの 2 つの細胞が混在していることから、この診断名とした。

3 牛の腹腔内の腫瘍

〔芦刈美穂（大分県）〕

症例：牛（ホルスタイン種）、雌、130 カ月齢。

臨床的事項：第四胃食滞との診断名で病畜として搬入、腹囲膨満を認めた。

肉眼所見：肝門部から臍臓に接して 20 × 10 × 10 cm の腫瘍を認め、また、肝臓全体に直径約 1～5 cm の腫瘍が多発していた。両腫瘍とも表面は灰白色で弾力があり、肝包膜と連続する被膜に被われていた。断面は乳白色でやや硬く、一部で癌贅を形成し、周囲組織との境界はやや不明瞭であった。その他、右腎腎杯部に直径約 8 cm の同様の腫瘍を認めた。

組織所見：肝門部腫瘍や肝臓腫瘍の腫瘍組織は膠原線維により大小不同の胞巣に分画され、腫瘍細胞は円形から多形の淡明な核を有し、肝組織、臍臓組織内に浸潤性に増殖していた。腫瘍細胞は PAS、トルイジンブルー、アルシアンブルー、グリメリウス染色で陰性であった。また、免疫染色ではアクチン、デスミン、サイトケラチン、クロモグラニン A、 α -フェトプロテイン、ソマトスタチン、シナプトフィシンに陰性、NSE には弱陽性、ビメンチンには一部陽性を示した。

診断名：未分化型カルチノイド（肝芽腫の疑いもあり）

討議：本例ではカルチノイドでみられるグリメリウス、クロモグラニン A 陽性顆粒が腫瘍細胞にみられず、また、肝芽腫において陽性所見となる PAS 染色、 α -フェトプロテインが陰性であることから確定診断には至らなかった。腫瘍の形態学的特徴、発生部位、転移の状況から未分化型カルチノイドと診断されたが、肝芽腫の疑いもあるとの異議もあった。本例は非常に分化度が低いものと推察された。

4 鶏の腹腔内腫瘍

〔宇田圭見子（山梨県）〕

症例：鶏（ブロイラー）、雄、56 日齢。

臨床的事項：著変なし（5,760 羽中の 1 羽）

肉眼所見：筋胃から小腸漿膜面にかけて、10 × 3 × 3 cm の黄白色の腫瘍が付着していた。腫瘍は 0.3～1.5 cm の結節が融合してカリフラワー状を呈していたが、筋胃漿膜面には孤立性の結節もあった。また、左腎の漿膜面にも 3 × 1 × 1 cm の同様な腫瘍があった。腫瘍は硬く、断面は黄白色、均質であった。その他、軽度な肝包膜炎と心外膜炎があった。なお、肺は検査していない。

組織所見：腫瘍は、薄い被膜に覆われ、エオジン好性の壊死巣とヘマトキシリンに淡染する構造物の周囲を、多核巨細胞、線維芽細胞、類上皮細胞および偽好酸球が取り囲んでいた。ヘマトキシリンに淡染する構造物は、PAS 反応陽性であり、グロコット染色により、Y 字型に分枝し分節した隔壁を有する菌糸を持つ真菌であることを確認した。

診断名：*Aspergillus flavis* による肉芽腫性漿膜炎

討議：菌糸の形態のみから原因菌の特定を行うことは困難であるとの助言があった。なお、後日の検査（DEXPAT（TaKaRa）により DNA を抽出、Nested-PCR 法実施）で、原因菌は、*Aspergillus flavis* と同定された。

5 鶏の原発部不明の腹腔内腫瘍

〔飯田奈都子（静岡県）〕

症例：鶏（ブロイラー）、雌、54 日齢。

臨床的事項：同一ロット 2,712 羽中の 1 羽に発生。やや発育不良であった。

肉眼所見：腫瘍は内臓中抜きの際に落下したものと思われ、内臓摘出後検査においてバット上で発見された。そのため、腫瘍がと体のどの部位に付着していたかは不明であった。腫瘍は 14.0 × 8.5 × 3.0 cm で軟らかく、粘液に覆われたような感触があり、乳白色～灰白色を呈した。表面および断面には透明あるいはやや白みを帯びた粘液を容れた大小さまざまな囊胞が多数みられ、黄色顆粒や不規則な結節も散見された。腫瘍はホルマリンに浸漬

すると浮遊した。気嚢炎を認めた他は臓器に著変はみられず、健常な卵巣も確認できた。

組織所見：肉眼でみられた嚢胞の多くは、周囲に軟骨を伴い、線毛を有した上皮細胞や杯細胞で内張りされた気管支様構造をとり、その他消化管上皮様構造も認められた。肉眼的に乳白色を呈した部分の多くは脂肪組織で占められ、灰白色部分は神経様組織、非角化扁平上皮や上皮性真珠を伴う表皮様構造、骨・軟骨組織、平滑筋・横紋筋組織、腺組織などがさまざまな割合で混在し、おのおの成分の分化度は高かった。免疫染色で神経様組織は抗S-100蛋白抗体および抗NSE抗体に陽性を示した。

診断名：成熟奇形腫

討議：過去、本研修会に提出された奇形種の事例に比べ、本例の分化度が高いことや奇形種の原因部位（メッケル憩室や卵巣、腸間膜との関係）について討議された。また、奇形腫は組織との連結が強くなく、中抜き時に容易に取れて落ちていたケースもあるという意見も出された。

6 ブロイラーの大腸菌症

〔熊谷智生（浜松市）〕

症例：鶏（チャンキー）、雄、75日齢。

発生状況：浜松市内の食鳥処理場において平成18年5月17日に出荷された同一ロット1,002羽のうち33羽を大腸菌症で全部廃棄した。本例はそのうちの1羽。

肉眼所見：肺は光沢を有して腫大、全体的に暗赤色を呈し、淡桃色の巣状病変が散在していた。肺斜隔膜面の漿膜は肥厚し黄色チーズ様物質が付着していた。肝臓は硬度を増して腫大し、粟粒大の乳白色病巣が個々に、あるいは集簇巣として肝臓全体に瀰漫性にみられ、集簇巣の中心部は暗緑黄色を呈していた。脾臓は巣状の退色部が多数みられた。気嚢および腸漿膜面には黄色チーズ様物質が付着していた。

組織所見：肺では呼吸細気管支領域を中心に多数の壊死巣が認められた。壊死巣は細菌塊と変性壊死した偽好酸球および赤血球から成り、その周囲を類上皮細胞、多核巨細胞が取り囲んでいた。壊死巣周囲の間質はうっ血し、気管支腔には粘液、偽好酸球等が貯留していた。肺斜隔膜面の漿膜は水腫状に肥厚し、気管支から気嚢へ続く粘膜上皮の一部が変性、壊死していた。その他、肝臓では多数の壊死巣が認められ、同部には多数の偽好酸球が集簇し、その周囲には少量の線維素がみられた。結合組織にはリンパ球、マクロファージ等が浸潤していた。脾臓では白脾髄が萎縮し、リンパ球が壊死、脱落していた。赤脾髄には巣状に多数の偽好酸球が浸潤し、単核食細胞系細胞が増加していた。腸管漿膜は水腫状に肥厚していた。細菌検査の結果、肺と脾臓から大腸菌が分離された。

診断名：化膿性肉芽腫性肺炎（疾病診断名：鶏大腸菌症）

討議：鶏大腸菌症は心嚢膜、肝包膜や気嚢の線維索性漿膜炎が主徴であるが、本例は内臓病変が主体であり、敗血症により病変が形成された非典型例であると考えられた。

7 鶏の卵巣腫瘍

〔清水弥生（兵庫県）〕

症例：鶏（ブロイラー）、雌、54日齢。5,349羽処理したうちの1羽で発見された。

臨床的事項：特に異常を認めなかった。

肉眼所見：体腔内の卵巣部位に5×4×1.5cmの腫瘍を認めた。腫瘍は被膜を有し、表面は不整で、発達した血管と血腫を認め、部分的に粟粒大の透明、白色結節が密発していた。断面は黄白色、充実分葉状で弾力があつた。腫瘍と卵管は薄い膜で連続していた。なお、卵巣は見当たらなかった。

組織所見：腫瘍表面には卵胞を含む卵巣組織が存在し、それを圧迫するように腫瘍細胞が増殖していた。腫瘍は、細い結合組織により大小さまざまな胞巣状構造を形成していた。腫瘍細胞は円形～類円形の核と細長い細胞質を有し、柵状に配列しセルトリ細胞腫様を呈していた。腫瘍細胞の核には陥凹を持つものもあった。腫瘍組織内に管腔形成や精細管様構造も多数認めた。一部では、ロゼット様構造もあり、中心部の均質液状物はPAS染色で陽性を示した。また、一部の腫瘍組織に大きな淡明核と不整形の細胞質を有する腫瘍細胞を認めた。

診断名：顆粒膜細胞腫（セルトリ細胞腫様）。

討議：本例のように典型的な顆粒膜細胞腫とは異なる場合「セルトリ細胞腫に似た組織パターンがある」という特徴を診断名に付け加える方がよいとの助言があり、セルトリ細胞腫様と附記することとなった。

8 鶏の肝臓と卵巣の腫瘍

〔本井ゆり恵（群馬県）〕

症例：鶏（採卵鶏）、雌、日齢不明。14,427羽処理したうちの1羽で発見された。

肉眼所見：肝臓右葉に6×5.5×4cm、左葉に2×1.5×1cmの乳白色、分葉状の弾力のある腫瘍を認めた。断面は乳白色、充実性で、結合組織により分画され胞巣状を呈していた。卵巣に長径1.5cmと2cm、脾臓実質内に0.2cm、腸間膜および十二指腸に直径0.1～0.3cmの乳白色腫瘍を認めた。卵管は萎縮しており、腫瘍は認められなかった。その他の臓器に著変はなかった。

組織所見：肝臓の腫瘍では、淡明で楕円形の核と弱好酸性の細胞質を持つ円柱状の腫瘍細胞が大小の腺管構造を形成している部位と、それらの腫瘍細胞が充実性に増殖している部位を認めた。卵巣の腫瘍も同様の形態を示したが、大小不同の核と好酸性の広い細胞質を有する大

型の腫瘍細胞が、不整形な腺管構造を形成する部位も認めた。鍍銀染色では、好銀線維が腺管を取り囲む様に発達していた。抗ケラチンポリクローナル抗体を用いた免疫染色で腫瘍細胞は陽性を示したが、一部に陰性を示す部位も認められた。抗オボアルブミン抗体に対して腫瘍細胞は陰性だった。

診断名：胆管細胞癌

討議：腫瘍はおもに腺管構造をとり、腺管だけでなく充実性の部位にもケラチン陽性所見がみられたため、胆管細胞癌と診断したが、大型の腫瘍細胞がみられたことや充実性の部位が一部ケラチン陰性だったこと等から肝胆管細胞癌を疑うという意見もあった。

9 牛の皮膚腫瘍

〔岡畑一幸（兵庫県）〕

症例：牛（ホルスタイン種）、雌、3歳。

臨床的事項：体格は大、栄養状態は普通、跛行しており、体温39.5℃であった。

肉眼所見：右肘付近の皮膚に鶏卵大～ラグビーボール大の腫瘍が多発していた。また、左前肢にも鶏卵大の腫瘍を複数認めた。ほとんどの腫瘍は、剥皮とともに筋肉から分離され、皮膚に付着した。腫瘍剖面は黄白色、充実性で光沢があり、弾力性を認めた。腫瘍は一部結合組織により区画されていた。心外膜面に拇指頭大、乳白色の退色部を認めた。剖面では小血管周囲の心筋が退色していた。肝リンパ節および空腸リンパ節は鶏卵大に腫大し、剖面は乳白色、充実性で脆弱であった。その他、右側腹壁や右胸骨下顎筋付近にピンポン玉大の腫瘍を数個認めた。小腸と大腸は一部水腫状であった。

組織所見：表皮はやや薄く、表皮直下から皮下組織まで、類円形～紡錘形で淡明な核をもつ腫瘍細胞がび慢性に浸潤増殖していた。心外膜から心筋内部に向かって腫瘍細胞が筋線維間に浸潤していた。肝リンパ節および空腸リンパ節も皮膚と同様な腫瘍細胞の浸潤増殖を認め、固有構造は崩壊していた。その他、ゲル内沈降反応およびPHA反応などの抗体検査でBLV抗体は検出されず、PCR反応でBLVの遺伝子は増幅されなかった。

診断名：リンパ腫（疾病診断名：牛白血病（皮膚型））

討議：皮膚型の牛白血病はT細胞由来といわれ、そのほとんどが、組織侵襲性が強いといわれており、細胞形態もいろいろなタイプを持っている。リンパ腫を疑った場合、血液や腫瘍部位のスタンプ標本作製し細胞の形態を確認することが肝要であるとの助言があった。

10 豚の肋骨の腫瘍

〔安食未央（山形県）〕

症例：豚（雑種）、雌、推定6カ月齢。

臨床的事項：健康畜として搬入され、特に異常は認め

られなかった。

肉眼所見：頭部検査、内臓検査で異常を認めなかった。枝肉検査で、胸腔に隆起する、左第7肋骨に8×5×3cm、左第4肋骨に4×7×3cmの、表面が粗造な乳白色の腫瘍を認めた。第7肋骨の腫瘍には腫瘍性骨折がみられた。また、肋骨の壁側胸膜面に播種状に隆起する小結節を多数認めた。腫瘍剖面は乳白色、脆弱で、肋骨の骨髓より骨膜をおし上げるように胸膜面に隆起し、皮質骨は菲薄化し、腫瘍は肋間筋にもおよんでいた。右第1肋骨基部にも腫瘍を認め、胸骨リンパ節は腫大、右鼠径リンパ節も軽度に腫大していた。左右浅頸、左右膝窩、左右内側腸骨および左右腎リンパ節には異常はみられなかった。

組織所見：左第7肋骨腫瘍部骨髓は腫瘍細胞の増殖により固有構造を消失していた。腫瘍細胞は、骨髓から、骨膜、胸膜、肋間筋までび慢性に浸潤し、出血、壊死も伴っていた。主体をなす腫瘍細胞は、リンパ球様細胞で、細胞質は乏しく、核は円形～類円形で、クロマチンに富み、1個～数個の核小体を認めた。マッソントリクローム染色で、腫瘍組織の周囲を膠原線維が不規則に取り囲んでいた。渡辺氏鍍銀法では、腫瘍細胞の周囲を細網線維が取り囲んでいた。その他、核分裂像やスターリースカイ像もみられた。また、胸骨、浅頸、膝窩および鼠径の各リンパ節にもリンパ球様腫瘍細胞が浸潤していた。

診断名：肋骨に発生したリンパ腫

討議：リンパ性白血病とする当初の診断名に対して、リンパ性白血病は、本質的に腫瘍細胞が骨髓で瀰漫性に増殖しなければならず（末梢血にも異常リンパ球が出現する）、本例は腫瘍細胞が骨髓の血管の周りに結節を作るように増殖しておりリンパ腫の病変であり、リンパ性白血病の病変とは異なるとの助言があった。

11 豚の筋肉

〔松尾博昭（岩手県）〕

症例：豚（LW種）、不明、6カ月齢。

臨床的事項：特定農場がある期間に出荷した多くの豚の後肢筋肉に特異な病変を認めた（月最大17.5%）。

肉眼所見：左側大腿部の半腱様筋および半膜様筋が褪色し、縞状～網目状の硬結感を有する白色病変を認めた。

組織所見：筋束間の間隔は広くなり多数の空隙形成が観察された。筋束中の筋線維は虫食い状に消失し、筋束構造は不明瞭となり類円状に膨化した筋線維が散見された。筋束間および筋線維間にみられた空隙は脂肪組織の浸潤とみなされた。筋線維間および筋束間の結合組織の増生や炎症像は認められなかった。

診断名：筋肉の間質性脂肪浸潤

追記：当該農場は、幼豚（30日齢）に、合成抗菌剤を本来頸部筋肉に接種すべきところ、誤って臀部に接種し

ていた。投与部位を修正したところ当該病変が激減した。

討議：過去に牛と鶏に合成抗菌剤を実験的に接種し、経時的变化を調査したところ、接種後数日で接種部位（筋肉）に強い壊死、再生像を認めるという経験をしたことがある。本例の脂肪浸潤は筋線維消失後、補空性におきたものと考えられ、それ以前に筋肉の萎縮、変性、壊死があったものと判断されるが、接種から5カ月以上経っているので目立たなくなったと考えられる。また、病理学的には、「変性」ではなく筋肉の脂肪への「置換」というべきものである等の意見が助言者から出された。当該薬剤は溶解性を増すため強いアルカリ処理がなされている可能性がある（当該薬剤のpHは11）。その基剤により当該病変が起きた可能性も示唆された。

12 豚 の 舌

〔新井陽子（埼玉県）〕

症例：豚（雑種）、去勢、約6カ月齢。

臨床的事項：健康畜として搬入され、特に異常は認めなかった。

肉眼所見：舌体部から舌尖部にかけ5～8mm、乳白色、ブラシ状の突起物がS字状に観察された。突起物は舌表面にみられ、基部において連続し、乳白色で硬固感を有していた。

組織所見：突起物は、角化を伴う重層扁平上皮によって構成され、乳頭状に増殖していた。角質層は、正常部位と比較して幅が広く、一部、核が残存していた。有棘層も正常部位と比較して幅が広く、水腫性に腫大していた。基底層では核分裂像が多数観察された。抗パピローマウイルス抗体を用いた免疫組織化学的検査では、パピローマウイルス抗原は検出されなかった。また、舌表面にはヘマトキシリンに染まる細菌塊が多数みられた。

診断名：豚の舌乳頭腫

討議：肉眼による病変の広がりや粘膜固有層に形質細胞が多数観察されたことから、原因としてパピローマウイルスの関与を完全に否定できないとの助言があった。

13 豚 の 小 腸

〔星野麻衣子（新潟県）〕

症例：豚（雑種）、雌、6カ月齢。

臨床的事項：異常を認めなかった。

肉眼所見：約1mにわたって通常の3倍程度に太さを増す空回腸を認めた。断面は膨隆し、壁肥厚部位の粘膜は硬く、約1cmと肥厚していた。粘膜面は乳白色で、出血斑が散在していた。その他の臓器に肉眼的な著変を認めなかった。

組織所見：肥厚した粘膜では、粘膜固有層内に腫瘍細胞が増殖し、密に配列する部位と疎に配列する部位を認めた。腫瘍細胞が、密に配列する部位では、束状あるいは

は胞巣状に配列、疎に配列する部位では、増生する膠原線維間に散在していた。腫瘍細胞には3タイプがあり、偏在する大型円形の核と卵円形の細胞質をもつ細胞（細胞A）、大型円形の核をもち細胞質に乏しい細胞（細胞B）および小型楕円形の核をもち長紡錘形を呈する細胞（細胞C）を認めた。細胞Aおよび細胞Bに共通する大型円形の核には明瞭な核小体を1から複数認めたが、核分裂像は認めなかった。細胞Aの一部では細胞質にニッスル小体様物質を含み、2核の細胞を認めた。免疫染色で細胞AはS-100蛋白陽性およびニューロフィラメント一部陽性、細胞BはS-100蛋白陽性およびクロモグラニンA一部陽性、細胞CはS-100蛋白陽性およびグリア線維性酸性蛋白陽性であった。また、病変部の粘膜下神経叢および筋間神経叢の腫大および増数を認めた。腸間膜リンパ節を含め、その他の臓器に組織学的な著変を認めなかった。

診断名：神経節細胞腫（疾病診断名：神経節細胞腫症）

討議：肉眼的な病変の広がりを加味し、疾病診断名は神経節細胞腫症が適切であるとの助言により、神経節細胞腫症となった。

14 豚 の 大 腸

〔大場剛実（富山県）〕

症例：豚（雑種）、雌、約6カ月齢。

臨床的事項：と畜前日の一般搬入時の生体検査では異常を認めなかったが、当日の生体検査では、右側横臥を呈し、起立不能となっていた。

肉眼所見：結腸および盲腸の漿膜下に円形（直径1～2cm）の暗赤色病巣が散在していた。粘膜面では、漿膜下の円形病巣に一致して潰瘍が認められた。また、潰瘍周囲の粘膜に緑黄色の偽膜様物が附着していた。胃には、噴門部および胃底に灰白色の不整形の潰瘍（2カ所：10×2、10×4cm）があった。肝臓は退色し、肺、心臓（心内膜下）、脾臓には出血巣が散在していた。腸間膜リンパ節、腸骨下リンパ節の断面では、辺縁が赤色を呈していた。

組織所見：結腸の円形病巣の粘膜は全層にわたり壊死し、粘膜表層は脱落していた。壊死領域と周囲の固有粘膜組織の境界では、帯状の著しい好中球の浸潤（分界線）を認めた。また、周囲の粘膜表層の上皮細胞も変性・壊死していた。グラム染色では、壊死領域ならびに粘膜表層にグラム陽性桿菌の増殖が目立っていた。その他の諸臓器のおもな所見として、肝臓に小葉中心性の変性・壊死を認め、腸間膜リンパ節、腸骨下リンパ節、鼠径リンパ節および膝窩リンパ節にはろ胞壊死を認めた。心臓の弁膜にグラム陽性桿菌が多数附着していた。大腸、胃、肝臓、脾臓および肺から、*Clostridium per-*

fringens (A型) を分離した。

診断名：*C. perfringens* による壊死性大腸炎

15 牛の肝臓の腫瘤

〔浅黄里恵 (山形県)〕

症例：牛 (黒毛和種)，去勢，27 カ月齢。

臨床的事項：病歴等はなく，一般畜として搬入された。生体検査でも，特に異常を認めなかった。

肉眼所見：肝臓横隔膜面に近い実質内部に， $6.5 \times 5.0 \times 5.0$ cm の腫瘤が孤在していた。腫瘤は淡黄色ないし乳白色を呈し，硬結感があり，結合組織により大小の葉に分割されていた。腫瘤の断面は平滑で，周囲肝組織との境界は明瞭であった。その他，肝臓全体に巣状壊死を認めた以外，他臓器に著変はなかった。

組織所見：腫瘍組織は，結合組織により不規則に区画され，胞巣状に増殖する部分と，結合組織による区画が不明瞭で索状に増殖する部分を認めた。肝組織との境界は一部明瞭で，増殖する腫瘍組織に肝組織が圧迫され，扁平化している部分もあった。腫瘍組織が胞巣状に増殖する部位では，腫瘍細胞が高度に脂肪滴を含んでいた。索状に発育する部分では，類洞様構造がみられ，軽度脂肪滴を含む腫瘍細胞と高度な髄外造血像がみられた。腫瘍細胞はどちらの部位においても肝細胞に類似しており，核分裂像は認められず，異型性は軽度であったが，一部で腫瘍細胞由来と思われる巨細胞が観察された。

診断名：低悪性度の肝細胞癌

討議：異型性が軽度であったので肝細胞腺腫との意見や，巨細胞は髄外造血時の巨核球であって腫瘍性の巨細胞形成ではないとの意見があった。

16 豚の肝臓の結節性病変

〔角田笑子 (神奈川県)〕

症例：豚 (雑種)，雌，6 カ月齢。

臨床的事項：病歴等はなく，健康畜として搬入され，生体検査時，特に異常を認めなかった。

肉眼所見：外側左葉横隔膜面に，径 8 mm の灰白色～淡桃白色を呈し，表面に軽度に隆起する結節を認めた。結節は硬結感を有し，周囲小葉間結合組織は増幅して網目状となり境界はやや不明瞭であった。断面において，結節の中心部に径 2 mm の灰白色～淡桃白色で乾燥感を有する組織を認めた。結節の壁は厚さ 2～4 mm で乳白色を呈し，光沢感を有していた。また，肝臓全体に径 2～5 mm で淡褐色～淡桃白色を呈し，表面にドーム状に隆起する結節または肝臓実質内に結節が散在していた。結節は球状で，周囲肝組織との境界は明瞭であった。結節断面は乳白色，不規則分葉状を呈し，前述の結節と同様の構造をとり壁の厚さは 1～3 mm であった。その他，肺炎および腹膜炎を認めた。

組織所見：外側左葉の結節の中心部には，好酸性壊死物質と多数の好酸球およびその頽廃物を認め，これを取り囲むように多数のリンパ球，好酸球，マクロファージおよび形質細胞が浸潤していた。結節外層や増幅した周囲小葉間結合組織内には，リンパ球が集簇し濾胞を形成していた。結節は厚い結合組織性の被膜に覆われ周囲肝組織との境界は明瞭であった。結節に隣接する肝小葉は圧迫され肝細胞は萎縮し，肝細胞索は乱れていた。肝全体に観察された小結節も基本的には同様の所見であった。

診断名：好酸球浸潤とリンパ濾胞増生を伴う間質性肝炎

討議：原因として寄生虫感染が疑われ，病変の違いは感染ステージによるもので，リンパ濾胞増生像は終末期の所見であるとの助言があった。

(以降，次号へつづく)